# 新編国歌大観

第四巻　私家集編Ⅱ
定数歌編

歌集

角川書店

# 新編国歌大観 第四巻

私家集編Ⅱ、定数歌編　歌集

昭和六十一年五月十五日　初版発行
平成四年五月二十日　再版発行

編　者　「新編国歌大観」編集委員会
発行者　角川春樹
発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三　郵便番号一〇二
振替東京二―一九五二〇八　電話　営業〇三―三八一七―八五二一　編集〇三―三三三一―一五一〇
印刷・製本所　凸版印刷株式会社
© Printed in Japan ISBN4-04-020142-6 C3592
落丁・乱丁本はお取替えいたします

# 凡例

㈠『新編国歌大観』第四巻 私家集編Ⅱ、定数歌編の歌集部に収める私家集ならびに定数歌は、原則として両編ともに広く一般に流布している系統、かつ私家集編では歌数の多い系統の中から最善本を選んで、底本とした。

㈡本文作成にあたっては、底本を尊重したが、利用の便をはかって、以下のような校訂を加えた。

①底本における和歌・連歌等の本文の偶然的な脱落・衍字・誤写などが他本によって修正しうる場合は校訂を行なった。

②底本の歌順が明らかに誤りと認められる場合は、他本によって訂正し、その旨を解題に記した。

③底本に存するミセケチなどは表示せず、原則として訂正結果に従った。また底本に存する記号・注記・校異の類は、作品成立時、もしくはそれに近い時期に加えられたと判断される場合にのみそのまま残し、他は原則として省略した。

④本文が孤本・稀本であるため他本によって校訂本文を作成しえぬ場合は、書写の誤りと見られる部分の右傍に（ママ）と注した。

⑤本文が判読しえぬ場合は字数分の□を用いることとし、長文で字数不明の場合は「　」によって表示した。

⑥本文に和歌・詞書等の脱落があり何行分かの空白がある箇所には、（空白）と表示し、また何字分かの空白がある場合は、その部分を「　」の記号により表示した。

㈢奥書・識語の類は、その集の撰者が自ら書いたと認められるもの以外は原則として省略した。ただし、撰者以外の奥書・識語は、必要に応じて解題に記した。

㈣各集ごとに、和歌・連歌の別なく、その歌頭（句頭）に通し番号を打った。ただし本文中に、改行等の形で独立表示されているものに限った。

㈤表記は底本のそれをできるだけ尊重したが、よみやすさへの配慮から、次のような処置をとった。

①いわゆる変体仮名は普通の平仮名に改めた。

②異体・別体の漢字は通行の字体に統一した。

③仮名遣いは歴史的仮名遣いに統一した。ただし字音語のうち、物名歌など特別の場合は底本通りの表記とした。

④活用語などの漢字表記については、必要に応じて最少限の送り仮名を加えた。

⑤漢字表記の助詞・助動詞は原則として平仮名に改めた。その他特異な宛字で平仮名に改めたものがある。

⑥反復記号は用いなかった。

⑦清濁は区別して示したが、清濁をこえた掛詞として用いられる

ものについては、原則として清音とした。

⑧和歌の難読字にはふり仮名をつけた。

⑨序・詞書・左注には適宜読点を打った。

⑩底本の片仮名表記は平仮名に改めた。

⑪以上のほか、底本の形態にかかわらず、例えば和歌は一行書き、長歌は句ごとに一字あきとし、あるいは作者名を原則として一定の位置にそろえるなどの処置をとった。

⑥解題は、その集および底本に関する基本的な事実を述べたほか、重要な校訂箇所などを記すにとどめた。

⑦索引に関しては索引部凡例を参照されたい。

## 第四巻　私家集編Ⅱ、定数歌編　略称一覧

式子内親王集　1式子
守覚法親王集　2守覚
太皇太后宮小侍従集　3小侍従
有房集　4有房
実国集　5実国
師光集　6師光
広言集　7広言
資賢集　8資賢
長方集　9長方
寂蓮法師集　10寂蓮
隆信集　11隆信
二条院讃岐集　12讃岐
長明集　13長明
金槐和歌集（実朝）　14金槐
明日香井和歌集（雅経）　15明日香
建礼門院右京大夫集　16右京大
明恵上人集　17明恵
後鳥羽院御集　18後鳥羽
俊成卿女集　19俊成女
隆祐集　20隆祐
兼好法師集　21兼好
草庵集（頓阿）　22草庵
続草庵集（頓阿）　23続草庵
慶運法印集　24慶運
慕景集　25慕景
堀河百首　26堀河百
永久百首　27永久百
為忠家初度百首　28為忠初
為忠家後度百首　29為忠後
久安百首　30久安百
正治初度百首　31正治初
正治後度百首　32正治後
建保名所百首　33建保百
洞院摂政家百首　34洞院百
宝治百首　35宝治百
弘長百首　36弘長百
嘉元百首　37嘉元百
文保百首　38文保百
延文百首　39延文百
永享百首　40永享百
御室五十首　41御五十
仙洞句題五十首　42仙五十
為尹千首　43為尹千
正徹千首　44正徹千
藤川五百首　45藤五百



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 第四巻　私家集編Ⅱ、定数歌編　歌集目次

（歌集ページ）（解題ページ）

## 私家集編Ⅱ


式子内親王集（書陵部蔵五〇一・三二）……七　六七九
守覚法親王集（神宮文庫蔵本）……一一　六七九
太皇太后宮小侍従集（書陵部蔵五一一・二〇）……一四　六八二
有房集（書陵部蔵一五〇・五六七、五〇一・三〇九）……一八　六八三
実国集（神宮文庫蔵本）……二七　六八四
師光集（三手文庫蔵本）……二九　六八四
広言集（書陵部蔵一五四・五二九）……三三　六八五
資賢集（書陵部蔵五〇一・二一一）……三四　六八六
長方集（神宮文庫蔵本）……三五　六八六
寂蓮法師集（書陵部蔵五〇一・七二五）……三八　六八七
隆信集（竜谷大学蔵本）……四六　六八八
二条院讃岐集（書陵部蔵五一一・二一）……六八　六八九
長明集（書陵部蔵五一一・一二）……七〇　六九〇
金槐和歌集―実朝―（高松宮蔵本）……七二　六九〇
明日香井和歌集―雅経―（日本大学蔵本）……八三　六九一
建礼門院右京大夫集（九州大学蔵本）……一〇九　六九二
明恵上人集（東洋文庫蔵本）……一二〇　六九三
後鳥羽院御集（書陵部蔵五〇一・六三九）……一二四　六九三
俊成卿女集（神宮文庫蔵本）……一四七　六九四
隆祐集（書陵部蔵五〇一・八三八）……一五一　六九五
兼好法師集（尊経閣文庫蔵本）……一六〇　六九六
草庵集―頓阿―（承応二年板本）……一六六　六九六
続草庵集―頓阿―（承応二年板本）……一九三　六九八
慶運法印集（天理図書館蔵本）……二〇七　六九八
慕景集（慶応大学蔵本）……二一三　六九九


## 定数歌編


堀河百首（日本大学蔵本）……二一七　七〇〇
永久百首（書陵部蔵葉・一八六一）……二四八　七〇二
為忠家初度百首（尊経閣文庫蔵本）……二六三　七〇二
為忠家後度百首（尊経閣文庫蔵本）……二七二　七〇三
久安百首（書陵部蔵一五五・三六）……二八一　七〇四
正治初度百首（書陵部蔵五〇一・九〇九）……二九八　七〇五
正治後度百首（内閣文庫蔵本）……三二三　七〇六
建保名所百首（曼殊院蔵本）……三三六　七〇七
洞院摂政家百首（西澤誠人蔵本）……三四九　七〇八

目次

宝治百首（書陵部蔵五〇一・九一〇）……三七一　七一二
弘長百首（百首部類板本）……四四七　七一四
嘉元百首（書陵部蔵一五四・三一）……四六一　七一五
文保百首（書陵部蔵五〇一・八九五）……五〇四　七一六
延文百首（書陵部蔵一五四・三二）……五三九　七一七
永享百首（百首部類板本）……五九六　七一八
御室五十首（書陵部蔵五〇一・七九五）……六一五　七一九
仙洞句題五十首（書陵部蔵五〇二・二三）……六二六　七一九
為尹千首（志香須賀文庫蔵本）……六三三　七二〇
正徹千首（広島大学蔵本）……六五一　七二一
藤川五百首（寛文七年板本）……六六六　七二一
全五巻収載作品一覧　七二三

新編国歌大観　第四巻　私家集編Ⅱ　歌集

# 式子内親王集　〔1式子〕

## 前小斎院御百首　式子内親王

### 春

一 春もまづしるくみゆるは音羽山峰の雪より出づる日の色
二 うぐひすはまだ声せねど岩そそくたるみの音に春ぞ聞ゆる
三 色つぼむ梅の木のまの夕月夜春の光をみせそむるかな
四 春くれば心もとけてあは雪のあはれふり行く身をしらぬかな
五 見渡せばこのもかのもにかけてけりまだぬきうすき春の衣を
六 跡たえていくへもかすめふかく我がよを宇治山のおくのふもとに
七 しるぞかし思ふばかりに打ちかすみめぐむ木ずゑぞながめられける
八 きえやらぬ雪にはつるる梅がえの初花ぞめのおくぞ床しき
九 たが里の梅のあたりにふれつらんうつりがしるき人の袖かな
一〇 梅の花恋しきことの色ぞそふうたてにほひのきえぬころもに
一一 花はいさそこはかとなく見渡せばかすみぞかをる春の明ぼの
一二 花ならでまたなぐさむるかたもがなつれなく散るをつれなくぞみん
一三 はかなくて過ぎにしかたをかぞふれば花に物おもふ春ぞへにける
一四 たれも見よ芳野の山のみねつづき雲ぞ桜よはなぞしらゆき
一五 花咲きしをのへはしらず春がすみ千草の色のきゆるころかな
一六 春風やまやの軒ばをすぎぬらんふりつむ雪のかをる手枕
一七 残り行く有明の月のもり影にほのぼのおつるはがくれの花
一八 うぐひすもものうくはるはくれ竹のよがれにけりな宿もさびしき
一九 ふる郷へ今はとむかふかりがねもわかるる雲のあけぼのの色
二〇 けふのみと霞の色もたち別れ春は入日のやまのはの月

### 夏

二一 春の色のかへうき衣ぬぎすてし昔にあらぬそでぞ露けき
二二 時鳥いまだ旅なる雲ぢよりやどかれとてぞうゑし卯の花
二三 忘れめやあふひを草に引きむすびかりねの野べの露の明ぼの
二四 あはれとや空にかたらふ時鳥ねぬ夜つもればよはの一こゑ
二五 雨すぐる花たち花に時鳥おとづれずしてぬれぬ袖かな
二六 今日はまた吹きそへてけりあしのやのこやの軒ばもあやめひまなく
二七 たたきつるくひなの音も深けにけり月のみとづる苔のとぼそに
二八 詠むれば月はたえ行く庭のおもにはつかに残るほたるばかりに
二九 さらずとてしばししのばぬむかしかはやどしもわきてかをる橘
三〇 夏の夜はやがてかたぶくみか月のみる程もなくあくる山のは
三一 名残なく雲のこなたははれにけり外山へかかる夕だちの程
三二 みじか夜のまどのくれ竹うちなびきほのかにかよふうたたねの秋
三三 松かげの岩まをわくる水のおとにすずしくかよふ日ぐらしのこゑ
三四 照すひはさやかに夏の空ながらときをすぎたる松の下かぜ
三五 里とほき板井のみ草打ちはらふ程こそ秋はとなりなりけれ

### 秋

三六 夏暮れてけふこそ秋はたつたやまかぜのおとより色かはるらむ
三七 秋きぬとをぎのは風のつげしよりおもひし事のただならぬ暮
三八 詠むれば衣手すずし久方のあまの河原の秋の夕ぐれ
三九 大方は秋のあはれを袖の露かくなれざらん人にとはばや
四〇 ふきむすぶ露も涙もひとつにておさへがたきは秋の夕暮
四一 袖のうへは露のやどりと成りにけりところもわかず秋たちしより
四二 秋はただ夕の雲のけしきこそそのこととなくながめられけれ
四三 おもほえずうつろひにけりながめつつ枕にかかる秋の夕つゆ
四四 からころもすそ野の露にたつ霧のたえまたえまは錦なりけり
四五 旅枕露をかたしくいはれのおなじとこにもなくうづらかな
四六 夕霧も心のそこにむせびつつわが身ひとつの秋ぞ更けゆく
四七 月のすむ草の庵を露もればのきにあらそふ松虫のこゑ
四八 おしこめて秋のあはれにしづむかなふもとの里の夕霧のそこ
四九 いづ方へ雲ゐのかりのすぎぬらん月はにしにぞかたぶきにける
五〇 よひのまにさてもねぬべき月ならば山のは近き物はおもはじ
五一 秋のよの雲なき月をくもらせて更行くままにぬるるがほなる
五二 槙の戸はささでならひぬあまの原よわたる月の影にまかせて
五三 それながらむかしにもあらぬ月影にいとどながめをしづのをだ巻
五四 さほ山のははその紅葉色に出でて秋ふかしとや霧にもるらん
五五 とどまらぬ秋をや送るながむればにはの木の葉のひと方へゆく

### 冬

五六 神無月嵐は軒をはらひつつねやまでしくは木葉なりけり
五七 いかにせむ千草の色はむかしにてまた更になき花の一本
五八 槙の屋に時雨は過ぎて行くものをふりもやまぬや木葉なるらん
五九 さびしさはやどのならひを木葉しく霜のうへにも詠めつるかな
六〇 冬くれば谷のを川の音絶えて峰の嵐ぞ窓をとひける
六一 にほ鳥のたちゐにはらふつばさにも落ちぬ霜をば月としらずや
六二 冬の池のみぎはにさわぐあしがものむすびぞあへぬ霜も氷も
六三 ましばつむ宇治の川舟よせ侘びぬさをの雫もかつ氷りつつ
六四 色色の花も紅葉もさもあらばあれ冬のよふかき松風の音
六五 またれつるひましらむらむほのぼのとさほの河原に千鳥鳴くなり
六六 さらぬだに雪のひかりは有るものをうたた有明の月ぞやすらふ
六七 吹くかぜにたぐふ千鳥は過ぎぬなりあられぬ軒に残るおとづれ
六八 思ふより猶ふかくこそさびしけれ雪ふるままのをのの山ざと
六九 すみなれて誰ふりぬらんうづもるる柴のかきねの雪の庵に
七〇 としなみのかさなることをおどろけばよなよな袖にそふ氷かな

### 恋

七一 尋ぬべき道こそなけれ人しれず心はなれて行きかへれども
七二 ほのかにもあはれはかけよ思草下葉にまがふ露ももらさじ
七三 夏山に草がくれつつ行くしかの有りとは見えてあはじとやする
七四 しるらめやかづらき山にゐる雲のたちゐにかかるわがこころとは
七五 たのむかなまだみぬ人をおもひねのほのかになるるよひよひの夢
七六 あはれともいはざらめやとおもひつつ我のみしりしよを恋ふるかな
七七 みえつるかみぬ夜の月のほのめきてつれなかるべき面影ぞそふ
七八 つかのまのやみのうつつもまだしらぬ夢より夢にまよひぬるかな
七九 したにのみせめて思へどかたしきの袖こす滝つ音まさるなり
八〇 むねのせき袖のみなとと成りにけり思ふこころはひとつなれども
八一 よる波もたかしのはまの松風のねにあらはれて君が名もをし
八二 いにしへにたちかへりつつみゆるかなほこりずまの浦の浪風
八三 恋ひ恋ひてよし見よ世にもあるべしといひしにあらず君も聞くらん
八四 つらしともあはれともまづわすられぬ月日いくたびめぐりきぬらん
八五 恋ひ恋ひてそなたになびく煙あらばいひし契のはてとながめよ

### 雑

八六 苔むしろ岩ねの枕なれ行きて心をあらふ山水のこゑ
八七 つもりゐる木の葉のまがふかたもなく鳥だにふまぬ宿の庭かな
八八 しづかなる草の庵りの雨のよをとふ人あらばあはれとやみむ
八九 すみなれんわがよはとこそおもひしかふしみの暮の松かぜの庵
九〇 さかづきに春の涙をそそきけるむかしにたる旅のまとゐに
九一 つたへ聞く袖さへぬれぬ浪の上夜ぶかくすみし四のをのこゑ
九二 山ふかくやがてとぢにし松の戸にただ有明の月やもりけん
九三 日に千たび心は谷になげはてて有るにもあらず過ぐる我が身は
九四 うらむともなげくとも世のおぼえぬに涙なれたる袖のうへかな

九五 別れにしむかしをかへるたびごとにかへらぬ浪ぞ袖にくだくる
九六 今日までもさすがにいかで過ぎぬらんあらましかばと人をいひつつ
九七 見しこともみぬ行すゑもかりそめの枕にうかぶまぼろしの中
九八 うき雲を風にまかする大空の行へもしらぬはてぞかなしき
九九 はじめなき夢を夢ともしらずして此をはりにや覚めはてぬべき
一〇〇 君が代のみかげにおふる山すげのやまずぞおもふ久しかれとは

又

春

一〇一 霞とも花ともいはじ春の色むなしき空にまづしるきかな
一〇二 雲ゐよりちりくる花はかつきえてまだ雪さゆる谷の岩かげ
一〇三 ゆきとぢてこゑををさめしおく山の松もしらべて春をつぐなり
一〇四 袖しげし今朝の雪間にかすが野のあさぢが本の若なつみみん
一〇五 見渡せばうらうらごとに立つかすみいづれもしほのけぶりなるらん
一〇六 苔ふかくあれ行く軒に春みえてふりずもにほふやどの梅かな
一〇七 梅が枝の花をばよそにあくがれて風こそかをれ春の夕やみ
一〇八 にほひをば衣にとめつ梅の花ゆくへもしらぬ春風のいろ
一〇九 またれつる花のさかりか吉野山かすみのまよりにほふ白雲
一一〇 此よにはわすれぬ春の面影よおぼろ月よの花のひかりに
一一一 ふかくとも猶ふみ分けて山桜あかぬこころのおくをたづねん
一一二 今朝みつる花の梢やいかならん春雨かをる夕暮のそら
一一三 我がやどのいづれのみねの花ならんせきいるる滝とおちてくるかな
一一四 鳥の音も霞もつねの色ならで花ふきかをる春の明ぼの
一一五 み山べのそこともしらぬ旅枕うつつも夢もかをる春かな
一一六 尋ねみよ芳野の花の山おろしの風の下なるわが庵のもと
一一七 たえだえに軒の玉水おとづれてなぐさめがたき春のふる里
一一八 くれて行く春のなごりを詠むればかすみのおくに有あけの月
一一九 かきねそふやへ山吹のにほひかな春の名残はいくかならねど
一二〇 帰る雁すぎぬる空に雲きえていかに詠めん春のゆくかた

夏

一二一 はる過ぎてまだほととぎすかたらはぬけふのながめをとふ人もがな
一二二 時鳥しのびねやきくとばかりに卯月の空はながめられつつ
一二三 我がやどのかきねのゆきをうの花に山時鳥すぐるにぞしる
一二四 まちまちて夢かうつつか時鳥ただ一こゑの明ぼののそら
一二五 さびしくも夜半のね覚をむら雨に山時鳥一こゑぞとふ
一二六 むかしおもふはなたち花におとづれて物わすれせぬ時鳥かな
一二七 手にかをる水のみなかみたづぬれば花橘の影にぞ有りける
一二八 春秋の色のほかなるあはれかなほたるほのめく五月雨のよひ
一二九 ながめつるをちの雲ゐもやよいかに行へもしらぬ五月雨の空
一三〇 山がつのかやり火たつる夕ぐれもおもひの外にあはれならずや
一三一 色色の露をまがきのとこ夏におきて過ぎぬる村雨の空
一三二 あふ坂の関の杉むら過ぎがてにあくまでむかふ山の井の水
一三三 あたりまで夏ぞわするる山陰の清水や秋のすみかなるらん
一三四 たそかれの軒ばの荻にともすればほに出でぬ秋ぞしたにこととふ
一三五 夕さればならの下風袖過ぎて夏のほかなる日ぐらしのこゑ

秋一首多

一三六 あけぬなりさぞとおもふに秋にそむ心の色のまづかはるらん
一三七 庭の苔軒のしのぶはふかけれど秋のやどりに成りにけるかな
一三八 秋くればときはの山に年をふる松しもふかくかはる声かな
一三九 草まくらはかなくやどる露のうへをたえだえみがくよひの稲妻
一四〇 道とほきをのの原深けにけり露わけ衣すりかさねつつ
一四一 虫の音もまがきのしかもひとつにて涙みだるる秋の夕暮
一四二 露さむみわくれば風にたぐひつつすがるなくなりをのの萩はら
一四三 ながむれば露のかからぬ袖ぞなき秋のさかりの夕暮のそら
一四四 露ふかき野辺をあはれと思ひしに虫にとはるる秋の夕暮
一四五 秋の夜のしづかにくらきまどの雨打ちなげかれてひましらむらん
一四六 露はさぞ野ばらしの原分入れば虫のねさへぞ袖にくだくる
一四七 むぐらさやどにも秋のたづねきて月にさそふはことしのみかは
一四八 秋の夜の更行くままの花のうへは月と玉とをみがくなりけり
一四九 月みれば涙も袖にくだけけり千千に成行くこころのみかは
一五〇 久かたの空行く月に雲きえてながむるままにつもるしらゆき
一五一 ながむればわが心さへ程もなく行へもしらぬつきのかげかな
一五二 やどる袖くだく心をかごとにて月と秋とをうらみつるかな
一五三 今はとてかげをかくさん夕にもわれをばおくれ山のはの月
一五四 ふけて行く秋のおもひもわびはつる涙なすてそそでの月かげ
一五五 ふかき秋の程こそみゆれたつた姫いそぐ木ずゑの四方の色色
一五六 吹きとむるおち葉が下のきりぎりすこゑばかりにや秋のほのめく

冬

一五七 神無月風にまかする紅葉ばになみだあらそふみ山べの里
一五八 冬の夜は木の葉がくれもなき月のにはかにくもる初時雨かな
一五九 いくかへりことだにつけて村時雨と山の木ずゑそめめぐるらん
一六〇 冬きてはふかからねどもおきてみるあしたのはらは霜がれにける
一六一 めぐりくる時雨のたびにこたへつつ庭に待ちとるならのはがしは
一六二 たのみつる軒ばのましば秋くれて月にまかする霜のさむしろ
一六三 旅枕ふしみの里のあさぼらけかり田の霜にたづぞなくなる
一六四 とけてねぬ夜半の枕をおのづから氷にむすぶをしぞことふ
一六五 おちたぎついはきりこえし谷水も冬はよなよなゆきなやむなり
一六六 霙の上の乙女のすがたしばしみんかげものどけきとよのあかりに
一六七 さらでだにおもひのたえぬ冬の夜の松かぜふけぬ霰みだれて
一六八 霜おきてなほたのみつるこやのあしを雪こそ今朝はかりはてけれ
一六九 高砂の松の木ずゑの雪をれを谷のいほりにききあかすかな
一七〇 今朝の雪にたれかはとはん駒の跡をたづぬる人の音ばかりして
一七一 せめてなほ心ぼそきは年月のいるがごとくにあり明のそら

恋

一七二 おきふかみつりするあまのいさり火のほのかにみてぞおもひそめてし
一七三 おもふより見しよりむねにたくこひのけふうちつけにもゆるとやしる
一七四 あはれとはさすがにみるやうちいでしおもふ涙のせめてもらすを
一七五 おもひかねあさぢはをのにせりつみし袖のくち行くほどをみせばや
一七六 かりにだにまだむすばねど人ごとの夏野の草としげき比かな
一七七 わが恋はあふにもかへすよしなくて命ばかりのたえやはてなん
一七八 かりそめに伏見の里の夕露のやどりはかへるたもとなりけり
一七九 浅ましやあさかの沼の花かつみかつみなれても袖はぬれけり
一八〇 わが袖のぬるるばかりはつつみしにすゑつむ花はいかさまにせむ
一八一 いりしより身をこそくだけあさからず忍ぶの山の岩のかけ道
一八二 とし月の恋もうらみもつもりてはきのふにまさる袖のふちかな
一八三 ときは木の契やまがふたつ田姫しらぬたもとも色かはり行く
一八四 なほさらばみたらし川にみそぎせん〔　　〕
一八五 ただ今の夕の雲を君も見ておなじ時雨や袖にかくらむ
一八六 たそかれのをぎのは風にこの比のとはぬならひをうちわすれつつ

雑

一八七 旅人の跡だに見えぬ雲の中になるればなるる世にこそ有りけれ
一八八 いそがずはふた夜もみまし草の庵のむかひの山にいづる月かげ
一八九 露霜も四方の嵐にむすびきてこころくだくるさよの中山
一九〇 ゆきとまるかたやそこともしら雲やもみぢの影やたび人の宿
一九一 ながむればあらしのこゑも波の音もふけひの浦の有明のつき
一九二 川舟のうきて過行く波の上にあづまのことぞしられなれぬる
一九三 あはじとてむぐらのやどをさしてしをいかでか老の身を尋ぬらん
一九四 けふはまたきのふにあらぬ世の中をおもへば袖も色かはりゆく
一九五 うきことはいはほの中もきこゆなりいかなる道もありがたのよや



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一九六 世の中におもひみだれぬかるかやのとてもかくてもすぐる月日を
一九七 あはれあはれおもへばかなしつひのはて忍ぶべき人たれとなきみを
一九八 ささがにのいとどかかれる夕露のいつまでとのみおもふものから
一九九 きほひつつさきだつ露をかぞへてもあさぢがすゑを猶たのむかな
二〇〇 としふれどまだはるしらぬ谷のうちのくち木の本も花を待つかな
二〇一 つるの子の千たびすだたん君が代を松のかげにやたれもかくれん

けんきう五年五月二日

春

二〇二 峰の雪もまだふる年の空ながらかたへかすめる春のかよひ路
二〇三 山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえだえかかるゆきのたまみづ
二〇四 雪きえてうらめづらしきはつ草のはつかに野べも春めきにけり
二〇五 にほの海や霞のうちにこぐ舟のまほにも春のけしきなるかな
二〇六 あし引の山のはかすむ明ぼのに谷よりいづる鳥の一こゑ
二〇七 ながめやる霞のすゑのしら雲のたなびく山のあけぼのの空
二〇八 袖のうへにかきねの梅はおとづれて枕にきゆるうたたねの夢
二〇九 ながめつるけふはむかしに成りぬとも軒ばの梅はわれをわするな
二一〇 いまさくらさきぬと見えてうすぐもり春にかすめる世の気色かな
二一一 まつほどの心のうちに咲く花をつひによし野へうつしつるかな
二一二 峰の雲ふもとの雪にうづもれていづれを花とみよし野の里
二一三 高砂の尾上のさくらたづぬればみやこのにしきいくへかすみぬ
二一四 とふ人の折らでをかへれうぐひすのは風もつらき宿の桜を
二一五 霞みるたかまの山のしら雲は花かあらぬかかへるたび人
二一六 夢のうちもうつろふ花に風吹きてしづこころなき春のうたたね
二一七 今朝みればやどの木ずゑに風過ぎてしられぬ雪のいくへともなく
二一八 いまはただ風をもいはじ吉野川岩こす浪にしがらみもがな
二一九 花は散りてその色となくながむればむなしき空に春風雨ぞ吹く
二二〇 水ぐきの跡もとまらずみゆるかな波と雲とにきゆるかりがね
二二一 なきとむる春をうらむるうぐひすのなみだなるらし枝にかへれる

夏

二二二 さくら色の衣にもまたわかるるに春をのこせるやどの藤浪
二二三 まつ里をわきてやもらす時鳥卯の花かげの忍びねのこゑ
二二四 ほととぎす鳴きつる雲をかたみにてやがてながむる有明の空
二二五 こゑはして雲路にむかふほととぎす涙やそそくよひのむら雨
二二六 時鳥よこ雲かすむ山のはのあり明の月になほぞかたらふ
二二七 水くらきいはまにまよふ夏虫のともしけちても夜をあかすかな
二二八 五月雨の雲はひとつにとぢはててぬきみだれたる軒の玉水
二二九 いにしへを花橘にまかすれば軒の忍ぶにかぜかよふなり
二三〇 かへりこぬむかしを今とおもひねの夢の枕ににほふたち花
二三一 まくず原浦かぜなるる夏のよはあきたちそむるせみの羽衣
二三二 すずしやと風のたよりを尋ぬればしげみになびく野べのさゆりば
二三三 さ夜ふかみ岩もる水のおとさえてすずしくなりぬうたたねの床
二三四 池寒きはすのうき葉に露はゐぬ野べに色なる玉やしくらん
二三五 月の色も秋ちかしとやさ夜更けてまがきのをぎのおどろかすらん
二三六 秋かぜとかりにやつぐる夕ぐれの雲ちかきまで行く蛍かな

秋

二三七 うたたねのあさけの風にかはるなりならすあふぎの秋の初風
二三八 ながむれば木の葉うつろふ夕月夜ややけしきだつ秋の空かな
二三九 日ぐらしのこゑもつきぬる山陰に又おどろかす入あひのかね
二四〇 あともなき庭のあさぢにむすぼほれ露のそこなる松虫のこゑ
二四一 我がやどのいな葉の風におどろけば露のあなたに初かりのこゑ
二四二 よせかへるなみの花ずりみだれつつしどろにうつすまののうら萩
二四三 白露の色どる木木はおそけれど萩の下葉ぞ秋をしりける
二四四 秋といへば物をもおもふ山のはにいざよふ雲の夕暮の空
二四五 花すすきまだ露ふかしほに出でてながめじとおもふ秋のさかりを
二四六 かりころもみだれにけらしあづさ弓引まの野べの萩の下露
二四七 萩のうへに雁の涙をおく露はこほりにけりな月にむすびて
二四八 ながめわびぬ秋より外のやどもがな野にも山にも月やすむらん
二四九 更けにけり山のはちかく月さえて十市の里に衣うつこゑ
二五〇 古郷はむぐらの軒もうらがれてよなよなはるる月のかげかな
二五一 とけてねぬ袖さへ色にいでねとや露ふきむすぶ峰の木がらし
二五二 しるきかなあさぢ色づく庭の面に人めかるべき冬のちかさは
二五三 秋の色はまがきにうとく成行けど手枕なるるねやの月かげ
二五四 あさぢはらはつ霜むすぶながら月の有明の空におもひきえつつ
二五五 きりのはもふみわけがたく成りにけりかならず人を待つとなれど
二五六 おもへどもこよひばかりの秋の空ふけ行く雲にうちしぐれつつ

冬

二五七 神無月みむろの山の山風にくれなゐくくる竜田川かな
二五八 木ずゑには残るにしきもとまりけり庭にぞ秋の色はたちける
二五九 見るままに冬はきにけりかものゐる入江のみぎはうす氷しつ
二六〇 時雨れつつ四方の紅葉ば散りはてて霰ぞおつる庭の木かげに
二六一 あれくらす冬の空かなかきくもりみぞれよこぎる風きほひつつ
二六二 あしがものはらひもあへぬ霜のうへにくだけてかかるうす氷かな
二六三 霰降る野路のささ原ふしわびてさらに都を夢にだにみず
二六四 さむしろの夜半の衣手さえさえてはつ雪しろし岡のべの松
二六五 むれてたつ空も雪げにさえくれて氷のねやにをしぞ鳴くなる
二六六 身にしむは庭火のかげにさえのぼる霜夜のほしの明がたの空
二六七 あまつ風氷をわたる冬の夜の乙女の袖をみがく月かげ
二六八 日かずふる雪げにまさるすみがまの煙もさびし大原の里
二六九 わたの原ふかくや冬の成りぬらん氷ぞつなぐあまのつりぶね
二七〇 人とはぬ都の外のゆきの中も春はとなりにちかづきにけり
二七一 おのづからながらへばなほいくたびかおいをむかへてあはれにおもはん

恋

二七二 しるべせよあとなき波にこぐ舟の行へもしらぬやへのしほ風
二七三 かくとだにいはかき沼のみをつくしする人なみにくつる袖かな
二七四 夢にてもみゆらんものをなげきつつうちぬるよひの袖の気色は
二七五 わが恋はしる人もなしせく床の涙もらすな露のをまくら
二七六 しらせばやすがたの池の花かつみかつみるままになみぞしをるる
二七七 わぎもこが玉ものすそによる浪のよるとはなしにほさぬ袖かな
二七八 あふことはとほつのはまの岩つつじいはでやくちんそむる心を
二七九 わが袖はかりにもひめや紅のあさか(はな)の野らにかかるゆふつゆ
二八〇 あふことはけふ松がえの手向草いく夜しをるる袖とかはしる(月イ)
二八一 まちいでてもいかにながめん忘るなといひしばかりの有明の空

旅

二八二 都にてゆきまはつかにもえいでし草引きむすぶさやの中山
二八三 あらいその玉もの床にかりねして我から袖をぬらしつるかな
二八四 みやこ人おきつ小島のはまびさしひさしく成りぬなみだへだてて
二八五 行すゑは今いく夜とかいはしろのをかのかやねに枕むすばん
二八六 松がねのをじまがいそのさ夜枕いたくなぬれそあまの袖かは

山家

二八七 我がやどはつま木こり行く山がつのしばしばかよふあとばかりして
二八八 今はわれ松のはしらの杉の庵にとづべきものを苔ふかきそで
二八九 山の端はみねの木の葉にきほひつつ雲よりおろすさをしかの声
二九〇 柴の戸を人こそとはねあし引の山より出づる月はまづみつ
二九一 山里はみねにたえせぬ松のこゑ木の葉にしのぶ谷の下水

鳥

二九二 あかつきの夕付鳥ぞあはれなるながきねぶりをおもふ涙に(枕イ)

二九三 鳴くつるのおもふ心はしらねどもよるのこゑこそ身にはしみけれ
二九四 身のうきをおもひくだけばしののめの霧まにむせぶ鴫のはねがき
二九五 はかなしや風にただよふ波の上に鴉のうきすのさても世にふる
二九六 うちはらひをののあさぢにかる草のしげみがしたにうづら立つなり

祝

二九七 君がへん千代松かぜに吹きそへて竹もしらぶるこゑかよふなり
二九八 天のしためぐむ草木のめも春にかぎりもしらぬ御代の末末
二九九 いくとせのいく万代か君が代に雪月花のともをまちけん
三〇〇 亀のをのいはねがうへにゐるたづも心してける水の色かな
三〇一 君がよはひみくまの川のさざれ石の苔むす岩になりつくすかな

雖入勅撰不見家集歌

三月のつごもりごろよみ侍りける

三〇二 ながむればおもひやるべきかたぞなき春のかぎりの夕暮の空

賀茂のいつきおり給ひて後、まつりのみあれの日、人のあふひ奉りて侍りけるに、かきつけ侍りける

三〇三 神山のふもとになれしあふひ草引きわかれてぞ年はへにける

題不知

三〇四 草も木も秋の末ばは見え行くに月こそ色はかはらざりけれ

百首の歌読み給ひける時、祝の歌

三〇五 うごきなく猶万代をたのむべきはこやの山の峰の松かげ

百首の歌読み給ひける時、恋の歌

三〇六 はかなしや枕さだめぬうたたねにほのかにかよふ夢のかよひ路

百首の歌の中に、恋の心を

三〇七 袖の色は人のとふまでなりもせよふかきおもひを君し頼まば

賀茂のいつきかはり給ひて後、からさきのはらへ侍りけるまたの日の、双林寺のみこのもとより、昨日は何事かなど侍りける返事につかはされける

三〇八 みたらしやかげたえはつる心地してしがのうらぢに袖ぞぬれにし

百首の歌の中に、法文の歌に普賢経の唯此願王不相捨離といへるこころを

三〇九 故郷をひとりわかるる夕にもおくるは月のかげとこそきけ

家の八重桜ををらせて、惟明親王の許につかはしける

三一〇 八重にほふ軒ばの桜うつろひぬ風よりさきにとふ人もがな

返し　惟明親王

三一一 つらきかなうつろふまでに八重桜とへともいはですぐる心を

百首歌の中に



三一二 はかなくて過ぎにしかたをかぞふれば花に物おもふ春ぞへにける
三一三 さりともと待ちし月日ぞうつり行く心の花の色にまがへて
三一四 夕立の雲もとまらぬ夏の日のかたぶく山に日ぐらしのこゑ

百首の歌たてまつりし時

三一五 まどちかき竹の葉すさぶ風の音にいとどみじかきうたたねの夢

擣衣心を

三一六 千たびうつきぬたの音に夢さめて物おもふ袖の露ぞくだくる

題不知

三一七 かぜさむみ木の葉はれ行くよなよなにのこるくまなきねやの月かげ
三一八 今はただ心のほかにきくものをしらずがほなるをぎのうは風

百首歌の中に、忍恋

三一九 玉の緒よ絶えなばたえねながらへば忍ぶることのよわりもぞする
三二〇 忘れてはうちなげかるる夕かなわれのみしりて過ぐる月日を

まつよひの心を

三二一 君まつとねやへもいらぬ槙の戸にいたくなふけそ山のはの月

恋の歌とて

三二二 はかなくぞしらぬ命をなげきこしわがかねごとのかかりける世に
三二三 いつきのむかしをおもひ出でて

時鳥そのかみ山のたびまくらほのかたらひし空ぞわすれぬ

三二四 おもひやれなにをしのぶとなけれども都おぼゆる有明の月

ながの月の有明のころ、山里より式子内親王におくれりける　惟明親王

返し

三二五 有明のおなじながめは君もとへみやこのほかの秋の山ざと

後白川院かくれ給ひて後、百首歌に

三二六 をののえの朽ちしむかしはとほけれどありしにもあらぬよをもふるかな

百首歌に

三二七 くるるまで待つべきよかはあだしのの末ばの露に嵐たつなり

百首歌の中に、毎日晨朝入諸定の心を

三二八 しづかなる暁ごとに見渡せばまだふかき夜の夢ぞかなしき
三二九 いかにせむ夢路にだにも行きやらぬむなしき床の手枕の袖

だいしらず

三三〇 たがかきねそこともしらぬ梅がかの夜半の枕になれにけるかな
三三一 吹きむすぶ滝は氷にとぢはてて松にぞ風の声はをしまぬ

百首歌中に、大悲代受苦の心を

三三二 けちがたき人のおもひに身をかへてほのほにさへやたちまじるらむ



後京極摂政、大炊殿にはやうすみ侍りけるを、かしこにうつりての春、八重桜につけて申しつかはしける

三三三 故郷の春を忘れぬ八重桜これやみしよにかはらざるらん

正治百首歌たてまつりける時

三三四 今はただ風をもいはじ吉野川岩こす花のしがらみもがな

だいしらず

三三五 おしねほす山田の秋のかり枕ならはぬほどのそでの露かな

としのくれの心を

三三六 人とはぬ都の外の雪の中に春はとなりとちかづきにけり

忍恋

三三七 君ゆゑといふ名はたてじ消えはてむよはの煙の末までも見よ

恋の歌の中に

三三八 しるらめや心は人に月草のそめのみまさるおもひありとは
三三九 いかにせむきしうつ波のかけてだにしられぬ恋に身をくだきつつ
三四〇 君がなにおもへば袖をつつめどもしらじよ涙もらばもるとて

だいしらず

三四一 かげなれてやどる月かな人しれず夜な夜なさわぐ袖のみなとに
三四二 人しれず物おもふ袖にくらべばやみちくるしほの波の下草
三四三 秋はきぬ行へもしらぬ歎かなたのめしことはこのはふりつつ
三四四 筆の跡にすぎにしことをとどめずはしらぬむかしにいかであはまし

建長三年影供歌合に

三四五 秋きてはいくかもあらじ吹く風の身にしむばかり成りにけるかな

水鳥を

三四六 あしがものはらひもあへぬ霜のうへにくだけてかかるうす氷かな

正治百首歌に

三四七 かり衣みだれにけりなあづさ弓引まの野べの萩の朝露
三四八 あられふる野路のささ原ふしわびてさらに都を夢にだにみず

正治二年百首歌に

三四九 さざれ石のなかのおもひのうちつけにもゆとも人にしられぬるかな

百首歌の中に

三五〇 たづぬればそこともいはず成りにけりたのめし野べのもずの草ぐき

だいしらず

三五一 つらくともさてしもはてじ契りしにあらぬ心もさだめなければ

恋歌中に

三五二 君をまづ見ずしらざりし古の恋しきをさへなげきつるかな

百首歌の中に

三五三 吹くかぜものどけき御代のはるにこそ心と花の散るは見えけれ
三五四 むすぶべき末もかぎらじ君が代に露のつもれるきくの下水
だいしらず
三五五 高砂のをのへの霞たちぬれどなほふりつもる松の白雪
阿弥陀経を
三五六 露のみにむすべるつみはおもくともものらさじものを花の台に
三五七 すみなれし跡をしのぶるうれしさにもらさずすくふ身とはしらずや
だいしらず
三五八 さらでだに身にしむ秋の夕ぐれに松をはらひて風ぞすぐなる
百首歌の中に
三五九 いでてこしみやこは雲にへだたりぬ末もかすみのいくへなるらん
三六〇 今はとてかげをかくさん夕にも我をばおくれ山のはの月
正治百首歌たてまつりける時
三六一 花をまつ面影見ゆる明ぼのは四方の木ずゑにかをる白雲
三六二 あれにけるふしみの里のあさぢはらむなしき露のかかる袖かな
落葉
三六三 冬きてはいくかに成りぬ槙のやに木葉しぐれのたゆる夜ぞなき
百首歌の中に
三六四 さびしさはなれぬるものぞ柴の戸をいたくなとひそ峰の木がらし
正治百首歌に
三六五 うちはらひをののあさぢにかる草のしげみがすゑにうづらたつなり
三六六 しるきかなあさぢ色づく庭の面に人めかるべき冬のちかさは
正治二年百首歌に
三六七 山かぜは峰の木の葉にきほひつつ雲よりおろすさをしかのこゑ
だいしらず
三六八 君ゆゑやはじめもはても限なきうきよをめぐる身とも成りなん
三六九 我のみはあはれともいはじたれもみよ夕露かかるやまとなでしこ
三七〇 我がやどのまがきにこむる秋の色をさながら霜にしられずもがな
三七一 玉の井の氷のうへにみぬ人や月をば秋の物といひけん
三七二 おのづからあふ人あらばことづてようつの山辺をこえ侘びぬとも
百首歌の中に
三七三 ながむればみぬいにしへの春までも面影かをるやどの梅がえ
だいしらず
三七四 これもまたありてなき世とおもふをぞうきをりふしのなぐさめにする

# 守覚法親王集〔2守覚〕

## 北院御室御集　守覚法親王

### 春

立春

一 年なみのたちかはりぬるしるしにやこほりし水もしたむせぶなり

鶯

二 おく山の谷のふるすのうぐひすもたかきにうつる春にあひにけり

梅喚鶯

三 梅が香を己がはぶきにほはせてともさそふなりうぐひすの声

霞

四 春来ても雪きえやらぬよし野山かすみにも又うづもれにけり
五 ゆふがすみそこともみえずたちこめて風のおとにぞきくの浜まつ

山霞

六 はるがすみしるべがほにて朝たてば中中まがふ山路なりけり

野望霞

七 朝日さす野〔　　〕おりゐる雲雀〔　　〕

海路霞

八 おきかけてとほざかりゆく声すなりかすみのうちにうたふ船人

鶯旅霞

九 八重まではけさぞかすみのこめてけるささがきうすきひなのかり庵

梅

一〇 ちりがたになるともをらん梅がえの花のさかりはやつれもぞする
一一 むめがえの花にうつろふうぐひすのこゑさへにほふはるのあけぼの
なにとなくよの中すさまじくおぼゆるころ、南面の梅のさきそめてさかぬかたもあるをみて
一二 梅のはなさきおくれたる枝見ればわが身のみやは春によそなる

春雪埋梅

一三 おのが色は雪よりそこにうづもれてにほふに梅はあらはれにけり

残雪未尽

一四 根にかへる花かと見ればまださかぬさくらがしたの雪のむらぎえ



### 桜

一五 花と見るよそめばかりのしら雲もはらふはつらき春のやまかぜ
一六 よしの山うきよのほかにのがれきて中中花にこころとめつる
一七 滝のうへのみふねの山の花ざかりみねにも尾にもかかるしらなみ
一八 かへるさのすゑほど遠き山路にもいかが見すてん花のゆふばえ

山花未綻

一九 かねてより猶あらましにいとふかな花まつみねをすぐる春風

野桜

二〇 いはしろの松のときはにことよせて野中のさくらちらずもあらなむ

樹陰翫花

二一 ともすれば木の下露に袖ぬらしなづさふ花よあはれとやみる
法金剛院のやへ桜のもとに、人人日ぐらしあそびて、かへりなん
とて花歌よみしに
二二 わするなよおなじ木陰にたづねきてなれぬるけふの花のまどゐを

海辺花

二三 さくらさく春やながめのうらならんはなにとまらぬ船人もなし

顕昭がもとより八重桜にそへて

二四 君がへん千とせの春をかさぬべきためしと見ゆるやへ桜かな

返し

二五 千代経べきためしときけば八重桜かさねていとどあだにおもはじ

落花

二六 花ゆゑに世のはかなさをしりぬればちらすも風のなさけなりけり
二七 見ればをし花ちるみねの夕がすみたちへだつるもこころありけり

鶯中落花

二八 山ざくら雪とふりつつあとたえて家路をこまにまかせてぞゆく
やよひついたち比に東山を見ありきしついでに、山家春興といふ
ことをよめる
二九 山ざとの柳さくらもをりをえてみやこのみやは錦なりける

夏

更衣を述懐によせてよめる

三〇 かずならでとし経ぬる身はそれながら猶人なみにころもがへしつ

朝見卯花

三一 今ぞ見るうのはな山の花ざかり明けても月のかげのこりけり

海辺五月雨

三二 さみだれの日かずつもりの浦なれや下枝もひちぬすみの江の松

深夜五月雨

三三 月も今はかたぶくほどになりぬらんはれずは晴れずさみだれの空
郭公
三四 過ぎぬとも声のにほひはなほとめよほととぎすなく宿のたちばな
三五 軒ちかく一こゑはしてほととぎすをちのこずゑになごり鳴くなり
夜ふけて郭公のなくをききて
三六 ふけてしも山ほととぎす来なくなりよひにはまたぬ人も聞けとや
杜郭公
三七 うれしさは袖にあまりぬほととぎすなきかさねたるころも手の森
三八 ほととぎすなのるにしるしこれぞこのたれそのもりのありすなりける
暮天郭公
三九 ほととぎす猶はつこゑをしのぶ山ゆふゐる雲のそこになくなり
郭公声稀
四〇 たづねみてうらみははてんほととぎすいづくもかくや夜がれしつらん
草上蛍
四一 今こそやほたるともしれちりて猶かへりやはおく草のうは露
蛍照海浜
四二 伊勢のうみの清きはまべにてる影を玉とひろへばほたるなりけり
蛍照船
四三 葉ずゑよりこぼるる露のここちしてあしわけぶねにほたるとびかふ
納涼
四四 しはつ山ならの葉かげのゆふすずみをりにもあらぬ秋風ぞふく
杜辺納涼
四五 すずしさはひとへに秋の心ちして夕かぜたちぬ衣手のもり
秋
初秋
四六 あさぢふの露けくもあるか秋きぬとめにはさやかにみえけるものを
初秋納涼
四七 風さわぐ竹のはかげ〔　　〕おもひたがへし秋はきにけり
七夕
四八 秋とのみなにかまたましひこ星のあふせをやすのわたりなりせば
四九 たなばたの秋さりごろも一夜のみかさぬるやまとなどかなりけん
五〇 さ夜更けてしのぶけしきのしるきかなきりたちかくすほしあひの空
萩
五一 やつるとも一えだをらんこはぎはらはなふみしだく鹿はなしやは
五二 わけゆかばたがたもとにもうつるらん我がしめし野のはぎが花ずり
五三 野辺ならば鹿か虫かにかこたましわれとちりぬる庭の秋はぎ
野花露
五四 秋の野の千くさのいろにうつろへば花ぞかへりて露をそめける
霧
五五 おとしるし鹿のかよひぢこれなれやきりのあなたにこのはふむなり
旅霧といふ題を人にかはりて
五六 みやこどりありとみえばやこととはんすみだがはらはきりこめてけり
海辺霧
五七 浦づたふさをのうたのみきこゆなりあまのともぶねきりがくれつつ
霧籠暁天
五八 あけぬとやくらきものからしりぬらんきりまをわくるしぎのはねがき
虫
五九 木がらしにむしの音たぐふ秋の野はつゆもなみだもとまらぎりけり
月
六〇 おほわだのうらわの風にきりはれて千舟のかずもみゆる月かげ
六一 はるばるとちさとのほかへゆく月はおのがひかりやしるべなるらん
六二 峰にても雲のちりゐる月かげをいはまにあらふ谷のした水
六三 風わたるこずゑに雨のおとはして月のみぞもる松がうらしま
六四 つくばねのしげきこまより月もればこのもかのもの雪のむらぎえ
六五 駒とめてみればこころもうつりけりひのくま川にすめる月かげ
八月十五夜、月のうたあまたよみしなかに
六六 逢坂のせきぢはるかにひくこまのあとなき雪や夜はの月かげ
高野にこもりたりけるころ、山居月のこころを
六七 世をいとふみやまがくれのすまひには月さへ雲のちりなかりけり
野宿見月
六八 秋の野にやどかる月をはな〔　〕あたりの露をはらふそでそふ
月澄海辺
六九 しほたるるいせをのあまの〔　　〕さまにもおはずうつる月かな
旅月
七〇 舟むやふをじまがいそのかぢまくら月さへやどるとまりなりけり
対月忘愁
七一 うきながらやどらむ月をまつほどにいづれはかわく袖の露かな
暁更月
七二 をしみかねひれふるまでぞしたはしきまつらの山のありあけの月
七三 あだに見し露は草葉に晨明の月ぞ中中かげはきえゆく
田家暁月
七四 明けぬとはよひより見つる月なれど今ぞ門田に鳴もたつなる



ある聖人来りて、夜もすがら法文などいひてやうやう明方になるほどに、さてしもあらじとて人人月の歌よみしに
七五 なにとこのにしへは月のしるべせでことぞともなく我さそふらん
擣衣
七六 これはさはおきゐのさとか秋の夜の露まどろまでころもうつなり
紅葉
七七 そめのこす木木のもみぢもあらじとてしぐれは山をめぐるなりけり
七八 もみぢ葉のこがれわたるや秋をやくけしきのもりの梢なるらん
紅葉日浅
七九 いつしかは色に出でしとしのぶやま下葉よりこそもみぢそめけれ
水辺菊
八〇 白妙のいろをうばひてさきにけりいつぬき川のきしのむらぎく
野外秋尽
八一 つねよりもあはれはふかし秋くれて人もこすののくずのうらかぜ
九月尽
八二 をしみかねはかなく暮れてゆく秋のなごりにとまる袖の露かな
九月尽日会あるべかりしに、はばかる事出来てとまりにしかば、顕昭がもとへ
八三 もろともにをしむも秋はとまらねどさてはなぐさむかたやあらまし
返し
八四 行く秋もをしむ人ゆゑとまるかと君ばかりにぞけふはまかする
冬
初冬
八五 ふゆきぬと水にこころやしりぬらん谷風さむみつららゐにけり
山中落葉
八六 さそひ行くあらしを道のしるべにて峰うつりする木木のもみぢば
水上落葉
八七 竜田川瀬おちの波もいろづきて木の葉のしたに声むせぶなり
時雨
八八 しぐれつつ過ぎぬるかたは雲きえてひとつけしきに見えぬ空かな
行路時雨
八九 はるばるといくののみちのむらしぐれ駒とめつべき木のしたもがな
雪
九〇 はらふともそのかひあらじくれ竹のよのまの雪にをれふしにけり
九一 めもはるに見るぞさびしき菅原やふし見の田ゐの雪のあけぼの
九二 葉がへせぬはま松がえも花さきてえもいはしろにふれる雪かな

九三 雪のうちにささめの衣うちはらひ野ばらしのはらわけゆくやたれ
九四 なに事を月に見わかんかぎごしの雲はれわたるみねのしらゆき

野雪

九五 まねかねど猶過ぎまうきけしきかな野辺の尾花の雪のしたをれ

遍昭寺にて池辺雪といふ事を

九六 波かけばみぎはの雪もきえなましこころありてもこほる池かな

山路雪

九七 ふみわけんかたこそしらね深山木の雪のしたゆくまれの通路

雪理社樹

九八 しらゆふを空よりたれかたむくらん今朝は露けきふるの神杉

暁天雪

九九 はれやらぬ横雲まよひ風さえて山の端しろきゆきのあけぼの

千鳥

一〇〇 はしだてやよさのうら松ふく風にこゑをたぐへて千鳥とわたる
一〇一 むれてゐるおのが羽風に波たててこころとさわぐうら千鳥かな

河上千鳥

一〇二 夜を寒みさほ風おくるたよりにはちどりの声も瀬瀬わたるなり

水鳥

一〇三 はねかはすともねのをしは打ちとけてこほりぞむすぶこやの池水

朝見水鳥

一〇四 あさごほりとけなん後と契りおきてそらにわかるる池のみづとり

歳暮

一〇五 ゆくとしのわかればかりを歎きにて身にはつもらぬならひなりせば
一〇六 ひとかたにおもひぞはてぬ春をまつこころにをしきとしのくれかな

歳暮に雪のふる朝、敦経朝臣がもとより

一〇七 雪のうちにくれぬる年ぞをしまるるわが身もいたくふりぬとおもへば

返し

一〇八 年くるる雪のうちにはふりぬともあけなば春にあはじものかは

雑

述懐

一〇九 おもひ出でのあらばこころもとまりなんいとひやすきはうき世なりけり
一一〇 何事をまつともなしにながらへてをしからぬ身のとしをふるかな

社頭述懐

一一一 われからや神のめぐみもへだつらんうき身のほどをみつの玉がき

あかつきのまくらに、なにとなく過ぎにしかたのはかなさなどおもひつづけて

一一二 なにごとも夢になりゆくいにしへのおもかげのこるあけくれのそら

閑居

一一三 うらさびて鶯はひかかるまきのやに窓うちすさぶむらさめの声

閑居水声

一一四 岩そそく水よりほかにおとせねばこころひとつをすましてぞきく

山家晩思

一一五 むぐらはふしづのふせやの夕けぶりはれぬおもひによそへてぞみる

旅

一一六 ふるさとをいとどよそにぞへだてつるこえこし山のやへのしら雲
一一七 いなしきやひなのかりねはめもあはでみやこを夢のうちにだにみぬ
一一八 ふみなれぬ岩根をつたふかよひぢにしばしたちのけ峰のしら雲

山路旅行

一一九 余所にてはかよひぢなしと見し峰を雲ふみわけていまぞこえゆく

旅宿松風

一二〇 ふみゆけば浜松がえに風こえてなさけありそのいそまくらかな

旅宿言志

一二一 よしさらば磯の苫屋にたびねせん波かけずとてぬれぬそでかは

和泉国新家といふ所にてしほゆあみしに、源中納言雅頼卿のもとより

一二二 かぎりあれば身こそ数にもいらざらめこころのゆくをいとはざらなん

かへし

一二三 ことのはのたよりの風にちるときぞかよふこころもいろに見えける

しほゆあみはてて、都へ帰るとてよめる

一二四 日数へしひなのすまひを思ひいでばこひしかるべきたびのそらかな

住吉にて、月を見てよめる

一二五 月のみぞもりあかしつるもしほ草しきつのうらの松のしたぶし

高野へまゐる道にて

一二六 あとたえて世をのがるべき道なれや岩さへこけのころもきてけり

香隆寺の辺なる所へ行きたりしに、あるじいづみにからふねをうけて、さまざまのものどもつみたるをみてよめる

一二七 唐船につめるたからやあまるらん今はの身をも玉ぞちりける

無常

一二八 はかなしやいかなる野辺の蓬生につひにはたれもまくらさだめん
一二九 常ならぬこの世のはてぞあはれなるおもへばたれもよもぎふのちり
一三〇 なきあとに影をだにやはとどむべきかへらぬ水のあわときえなば

暁、はかなき事ども思ひつづけて

一三一 あけがたのねざめのとこはうつつにてうきよをゆめと思ひしりぬる

秋の彼岸に、故宮のために仏事せんとて泉殿へまゐりしに、長尾の松原のまへをすぐとて

一三二 ありし世の松のみどりのけしきにてうき身はたのむ陰なかりけり

御前にまゐりつきて

一三三 はかなくて消えにしあとをきて見れば露ところせき庭のむら草

嵯峨の辺にときどきあそびなどせしところに、あるじうせてのち、ことどもひきかへてあらぬさまなりしかば

一三四 むかし見しすみかともなくあれはてておもひしよりもさびしかりけり

天王寺宮六条の御八講に参らんとて、ちかきわたりをかりてやどり給ひけるに、やまひおもくなりて、もとのすみかへもかへらでかくれ給ひにし後、門に柳のあまたある前をすぐとてよめる

一三五 一すぢにものぞかなしきかりにすむあるじたえにし青柳のいと

をさなくよりおほしたてたる童の、日来おもくわづらひしが、いまはかぎりと見なしてしかば、さてしもあるべきにもあらでなるたきといふ所にうつりわたりにき、なぐさめがたきやどのさびしさに、常に聞きなれたる岩根にそそく滝のおとまでもをりからにや身にしむ心ちすれば

一三六 せきあへぬなみだはたぐひありけりとをりしもむせぶたきつせの声

はかなくなりて後、雪の降るあした

一三七 おくれゐてひとりながむる庭の雪にこころまでこそうづもれにけれ

ありし世にかきおきたりし文どもなどこそはかなきかたみともなるべけれ、と思ひてとりよせてみれば、横笛の譜神楽催馬楽風俗の譜ども、又声明法則までも、いたらぬくまなくくらからずしたためおきたるさま、末の世のたから此道の鏡かなとためしなくみゆるにつけて、をしさもひとかたならで

一三八 苔のしたに笛の音までもうづもれてただ名ばかりぞ世にとまりける
一三九 袖の上になにのしづくののこるらんたえにしものをさざなみの声
一四〇 わが駒をなにかはやめんまつちやままつと逢ふべき道もかよはじ
一四一 おほとりのはがひの霜はきえはててなごりの露もとまらざりけり
一四二 もろともにとなへなれにし法のこゑそのふしぶしをいつかわすれむ

詩歌の藻の残りたるをみるにつけても

一四三 なきをまでかたみにとまるもしほ草うらさびてこそなみはかけけれ

経かくとて人のもとへつかはしたる文どもをとりあつめし中に、いつぞや病のをやみたりしたえまを、やみはてたるとやおもひけん、そのよし人につげたる文のありしをみるにも、常ならぬ世の

さだめなさも今さらにおもひしられしかば

一四四 まよふべきやみをばしらではかなくも霧のたえまとおもひけるかな

法事の日、むかしふきし笛を誦経にすとて

一四五 ふきなれし玉のよこぶえぬしなくてさもあらぬかねのおとぞかなしき



# 太皇太后宮小侍従集

〔3小侍従〕

## 太皇太后宮小侍従集

### 春

立春のこころを

一はるたつとしらでもみばや天の原かすむは今朝の思ひなしかと

二あらたまる春はけさかと思ふよりいづる日影もめづらしきかな

左大将実定家の百首のうち、山家のたつ春

三とけぬなるかけひの水の音信に春しりそむるみ山べの里

処処子日

四思ふどちひくまの野辺をよそにみてひとりねのびのまつぞ物うき

霞隔浦

五老のなみくる春毎に立ちそひてかすみへだつる和歌の浦なみ

鶯

六けふとてもうき身は春のよそなればほかに鳴くなり鶯の声

朝聞鶯

七しのびづまかへれば明くるをりしまれなみだもよほす鶯の声

遠尋若菜

八わかなつむとほぢの野べにたづねきてかへらむほどの空やくれぬる

松陰残雪

九千とせふる松の木かげになづさひて消えこそやらね春のあは雪

梅

一〇をる袖にしまずもあるかな梅がかの思ふこころのふかさばかりは

窓下梅

一一月させとおろさぬまどの夕風に軒ばの梅は匂ひきにけり

柳払水

一二みくさをばみぎはの柳枝たれてはらふひまよりやどる月影

閑中春雨

一三つれづれとふる春雨の日かずへてやむ世もしらぬものおもふかな

沢辺駒

一四いばへつつ沢辺にあるる春駒はなべてあしげとみゆるなりけり

帰雁

一五ともづれにこしそのかずもたらずしてなくなくいまやかへるかりがね

遥見帰雁

一六ながむれば雲路はるかとみゆるかなかすみがくれにかへるかりがね

喚子鳥何方

一七そまぎたつをののひびきによぶこ鳥いづれのみねときぞわかれぬ

桜

一八としふともちらで桜の花ならばめなれてかくやをしまざらまし

仙人に山の花をたづぬといふことを人人よみしに

一九とへどこのしづをはすぎぬ我が身にもおはぬ桜の花はいさとて

山路尋花

二〇こよひもや花ゆゑここにね山こるしづがまくらを又ならべてむ

花

二一ちりぬべき花を思ふと明けくれてはるはうらみのなげきをぞせぬ

花の歌とて人人よみしに

二二目かれせぬ木ずゑの花に我がごとくちらぬこころにならへとぞ思ふ

海辺落葉

二三ちる花をふきあげのはまの風ならば又も木ずゑにかへりさかせよ

向花惜春

二四あはれとや暮行く春もしのぶらむ花をふみてもおもふこころを

藤花年久

二五いく千代の春かさねぬる藤の花松はかぎれるためし思ひて

海路暮春

二六けふくるる春にむやひのふねならばおなじとまりはうれしからまし

三月尽

二七身につもる年の暮にもまさりけりけふばかりなる春のなさけは

夏

衣かへ

二八をしみこし花のたもとはそれながらうき身をかふるけふとならばや

卯花

二九いたづらにさきてやちらむ山がつの身のうの花はをりもしらねば

卯花失路

三〇ふりつもる雪を分けこし跡よりは卯花山のみちをたどれる

葵

三一いかなればその神山のあふひ草としはふれども二葉なるらむ

女与待郭公



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com